論　文

動作の進行を表す動詞の連体形

須田　義治（大東文化大学外国語学部）

On the attributive form of verb expressing action in progress

Yoshiharu SUDA

はじめに

連体という構文論的な位置において、本来は動詞のシテイルが表す進行中の動作を、動詞のスルも表すことがあることは、よく知られている。これは、二つの対立するアスペクト的な形が、コンテクストなどによって同じアスペクト的な意味を表す「競合」という現象であるが、本稿では、この競合について、スルとシテイルが動作の進行を表すとき、それぞれどのように使われているかを記述的に明らかにする。

以下、1では、スルしか使えない場合を検討し、2と3では、スルでもシテイルでも言えるが、それぞれ、シテイルが使われている場合とスルが使われている場合を見ていく。似た用法で、どちらで言っても変わりないような場合もあるが、シテイルとスルそれぞれの形の用法全体としては、異なる体系をなしているので、シテイルとスルを別々に見ていくことによって、その違いが明らかになるだろう。一見似た用法も、それぞれの体系の異なる特徴を多かれ少なかれ反映しているはずである。

ここにあげた用例は小説からとっているので、小説に特有の文体的な使用という面もあると思われるが、まずは、小説における使用ということで、こうした用法について検討することにする。

1. スルしか使えない場合

まずはじめに、スルしか使えない場合を見ていく。これは、場面の中で新たに起こってきた出来事であり、それがまだ終わっていないので、その出来事の過程の段階にあることを表していると言えるものである。ただし、限界に向かう過程の段階を表しているか、その過程全体を表しているか、はっきりしない場合も少なくない。

この意味を表すのは限界動詞なのだが、以下では、それを、変化を表すものと動作を表すものとに分けて述べる。

1-1. 変化を表す限界動詞

次の例は、場面の中で新たに生じてきた変化を、その変化の過程が進行していくように表している。このように、変化の展開過程の一段階がとりたてられるのは、多くは、他の動作と同時的な関係にあるような場合であり、それにより、瞬間的なものであっても、その変化の過程がさしだされることになる。

これは、シテイルの形をとれば、結果的な状態を表すことになってしまうので[1]、シテイルにかえることができない。

1）次の瞬間には、地面に倒れる鳥井の姿と、走り抜ける RV 車の後ろ姿が目に入る。（伊坂幸太郎・砂漠）
2）ラーメン屋の縦長の看板があり、その後ろに隠れる人影が見えた。（伊坂幸太郎・砂漠）
3）竹青荘の庭から勢いよく飛びだすバンを、ニラが尻尾を振って見送った。（三浦しをん・風が強く吹いている）
4）恐縮しきった様子で逃げるように立ち去るウェイターをちらりと目で追って、顔を戻し、閉じかけた瞼でつくった薄い暗がりのなか、テーブルクロスの縫い目を見つめた。（重松清・ビタミン F）

1-2. 動作を表す限界動詞

動作を表す限界動詞であれば、場面の中で始まった動作がまだ終わっておらず、直後に動作の限界に到達することを表す。これは、シテイルでも同じような動作の過程を表せる場合があるが、スルのほうは、その場で起こってきた動作であり、また、過程全体を表しているようでもあるという点で異なっている。

5）「どういうことですか？」と血相を変えて聞き返す和美を、雄介は手で制した。（重松清・ビタミン F）
6）鼻歌交じりにキッチンに入って冷蔵庫のドアを開ける秀明に、「なにかツマミになりそうなものないか？」と声をかけた。（重松清・ビタミン F）
7）緊張していた。白いマンションの入り口でインタフォンを押す柳さんを見て、不意に不安になった。（宮下奈都・羊と鋼の森）
8）玄関でジョギングシューズを履きながら、二階で秀明と優香を起こす綾子の声を聞いた。（重松清・ビタミン F）

[1] 場面の中で生じてくる変化でなければ、次のように、「しつつある」という形で、変化が実現する過程を表すことができる。
馬締は西岡には目もくれず、集まりつつある『大渡海』の原稿に赤鉛筆で修正を入れている。（三浦しおん・舟を編む）

2. シテイルが使用される場合

文の中で、名詞にかかっていく動詞は、シテイルの形で、名詞のさししめす人の動作などを表している場合、規定語というより述語のように働いている[2]。時間の中に位置づけられた動作の進行を生き生きと表現するアクチュアリゼーションという機能を持つとも言える。これは、連体節の述語であり、名詞が動作の主体をさしだしていれば、それに対する述語のようにもなっている。

シテイルの形は、終止の述語において、他の動作との同時的な関係を示すという機能を持つと言われるが、連体の位置においても、それは基本的に同じである。シテイルであれば、他の動作との同時的な関係を明示的に表しており、それがスルとの大きな違いとなっている。

しかし、以下の例も、ほとんどスルで言いかえることが可能ではある。ただ、シテイルの方が、同時性を表すような場合、より自然だということである。

2-1. アクチュアルな現在

「いま」という時間名詞をともなう場合、特に明確になるのだが、現在の時点に位置づけられている動作は、連体の位置にあっても絶対的なテンスであり、シテイルの形をとる。

次にあげる例では、連体節に動作主体をさしだす名詞が存在する。こうした連体節は、主語がある一つの文に近くなっており、このシテイルはとくに述語性が強いと言える。

9）いま岸辺が眺めているファイルは、書棚の目につきやすい段に収まっていた。（三浦しおん・舟を編む）

10）とはいえ、なかには困った電話もある。いま、岸辺が電話で話している相手もそうだ。（三浦しおん・舟を編む）

11）そこで走はようやく、いま自分が走っている原因に思い当たり、少し速度をゆるめた。（三浦しをん・風が強く吹いている）

2-2. 知覚される動作

次の例では、終止の位置に知覚動詞がきて、連体の位置の動詞が表す動作を、主語のさしだす主体が知覚することを表している。そのように、連体の動詞が、知覚される動作を表している場合、動詞はシテイルの形をとる。動詞のかかる名詞には、連体の動詞がさししめす動作の主体がさしだされている。

12）目を瞑って、とメモを取っている僕を見て、柳さんは慌てて訂正した。（宮下奈都・羊と鋼の森）

13）父は覗いている私を見上げて呶鳴った。（林芙美子・風琴と魚の町）

---

[2] 上記の１も述語的なものであった。

14）遠慮がちな間隔を開けて隣を歩いている早苗を横目で見ながら祐希は思った。（有川浩・三匹のおっさん）

このような文には、「姿、手元」のように、主体の側面や部分をさししめす名詞が使われているものもある。そして、動作の主体は、「が」格の名詞以外に、「の」格の名詞でもさしだされる。
「姿」などの名詞の場合は「～しているのを見る」などのように言いかえることができるが、「手元、手つき」など、部分を表す名詞が使われている場合は、その動きの部分へ焦点があてられる。

《全体》

15）独演を続けている自分の間抜けな姿が窓ガラスに映っているのを見て、急にあほらしくなって企画書を放り出した。（荻原浩・神様からひと言）

16）僕と西嶋はそれが嘘だと知っていた。街中で鳥井が女の子と遊んでいる姿を幾度も目撃したことがあった。居酒屋から出てくる鳥井や、映画館に入る鳥井を。（伊坂幸太郎・砂漠）

《部分》

17）私は蓮根の天麩羅を食うてしまって、雁木の上の露店で、プチプチたこの足を揚げている、揚物屋の婆さんの手元を見ていた。（林芙美子・風琴と魚の町）

18）私達は、しばらく、その男達が面白い身ぶりでかまぼこをこさえている手つきに見とれていた。（林芙美子・風琴と魚の町）

「聞く」という知覚動作による認識の場合もシテイルが使われるが、この場合は、「声」という名詞が使われている。これは、3-3-3-1 で述べる、「音」などの名詞につき「どんな～か」という物の特徴を表すスルとは異なっている。

19）手持ち無沙汰で立っていると、すぐ脇の、女性用トイレから声が漏れてくることに気づいた。洗面台のところで、喋っている声だ。（伊坂幸太郎・砂漠）

20）「女の子をじろじろ見ても、嫌がられない機会」と鳥井は言って、ぎゃはは、と笑ったが、すぐ隣に南がいるのか、うんそうかそうか嫌がられるか、と小声で応じている声も聞こえてきた。（伊坂幸太郎・砂漠）

「想像する、確認する、気づく」などの認識を表す動詞でも同様である。

21）ひたいを地面にこすりつけている自分を想像して涼平はぶるりと体を震わせた。（荻原浩・神様からひと言）

22）流して走りつつ、全力で走っている一団を常に確認するのには神経を要した。（三浦しを

ん・風が強く吹いている）

23）ニコチャンは無意識のうちに煙草を探している自分に気づき、再び針金をいじりだした。（三浦しをん・風が強く吹いている）

2-3. 他の動作と同時的な関係にある動作

おもに終止の位置にさしだされている他の動作と同時的な関係にある動作を表している場合も、連体の動詞はシテイルの形をとる。これにもその動作の認識が介在していると考えられるが、それには触れないで、その認識の結果としての反応などがあとに続くのである。

これは、ふつう、連体節と文全体とで、それぞれのさしだす動作の主体が異なっているが、同一の場合もある。

《異なる主体》

24）休憩室でまだしゃくり上げている女子大生倉田に、清一は落ち着いた声で話しかけた。（有川浩・三匹のおっさん）

25）朝食を用意している芳江に声をかけると、芳江は「あらそう」と素っ気ない相槌を打った。（有川浩・三匹のおっさん）

26）多田はぶつぶつ言っている行天を引きずって、部屋を出た。（三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒）

27）次に、アサコさんはホテルに戻るように言って、びっくりして見ている父の目の前で、ヘーハチロさんのトラックにいくつかの荷物を積んだ。（池澤夏樹・南の島のティオ）

28）「この島は初めてですか？」と、ロビーの隅に荷物を置いて宿泊カードの記入をしているトムさんに父がたずねた。（池澤夏樹・南の島のティオ）

《同一主体》[3]

29）ガラスごしに人の流れを見つめている目が、どこか据わったようになってきた。（宮部みゆき・地下街の雨）

30）こうしている間にも、高度不足になり、コントロールを失ってほとんど水平飛行しているロケットは太平洋上空を音速に近いスピードで飛び続けているはずだ。（池井戸潤・下町ロケット）

次の例のように、名詞が動詞のさししめす動作の対象をさしだす場合も同様である。

31）もう一方の煮干しや削り節だけを煮こんでいるずんどうの中身をひと口すすって光沢が顔

[3] これらの例は名詞のさしだすものが人ではない。

をしかめた。（荻原浩・神様からひと言）

32）これだけ客が自分のやっているゲームに集中している状態なら、筐体や両替機に悪さをする奴がいても気づかれない可能性は高い。（有川浩・三匹のおっさん）

同時性の一種と言えるものだが、次の例は、連体のシテイルに、終止の述語の動作や状態（おもに心理的な状態）を引き起こす原因やきっかけとなるものがさしだされている。これは、同一主体のものが多い（例 36 は異なる主体である）。

33）相変わらず気にする必要のない体型を気にしている早苗は、いじましくちびちびとポテトに手を伸ばしはじめた。（有川浩・三匹のおっさん）

34）手をついてお辞儀をしている自分自身が哀れになって来た。（林芙美子・耳輪のついた馬）

35）日射しは強いし、そばで待っているぼくたちはすぐに飽きてしまって、木陰に入った。（池澤夏樹・南の島のティオ）

36）一所懸命言葉を探している由仁に、思わず笑みがこぼれる。（宮下奈都・羊と鋼の森）

2-4. 内容としての動作

次の例は、「光景、風景」などの抽象的な名詞と、その内容となる動作をさしだすシテイルとの組み合わせである。これは、場面の中で起こる動作ではないが、動作の過程の段階をとりたてて表しているのである。

似た例がスルにもあるが、シテイルであれば、動作の一段階をとりだして表しており、スルであれば、動作の過程全体を表しているようであるという点が異なっている。それとともに、使われる名詞も、シテイルは「光景、風景」などが多く使われ、スルは「ところ、シーン」などが多く使われるというように、少し異なるようである。

37）深夜の CD ショップで、背筋の伸びた、立ち姿も美しい若い女性が、三十年も前のパンクロックのアルバムを買っている光景は、幻惑的かもしれない。（伊坂幸太郎・砂漠）

38）でも、今こうして羊のことを考えながら思い出すのは、風の通る緑の原で羊たちがのんびりと草を食んでいる風景だ。（宮下奈都・羊と鋼の森）

39）埃まみれの写真をティッシュで拭うと、少年が照れくさそうにピアノの前で笑っている写真だった。（宮下奈都・羊と鋼の森）

2-5. 空間的な関係

次の例も、他の動作との同時性を表しているが、名詞に「そば、横」などの相対的な位置関係を表す形式名詞が使われ、一時的な空間的な配置関係の基点をなす動作をシテイルが表すようになっている。

これは、他の動作との同時的な関係という時間のアクチュアル化であるとともに、その場面における空間の具体化としても働いている。

40)「はア、骨節が痛くて痛くて……」と云って、たっぷり寝た後のふくれた顔で、釣り竿を継いでいる息子のそばへ来て、「早いな」と云った。(林芙美子・山中歌合)
41) 靴を脱いでいる鳩麦さんの横から、さっと中に入り、受話器を上げた。(伊坂幸太郎・砂漠)
42) ユキはさっさと、部屋の隅で針金人形を作っているニコチャンのほうへ行ってしまった。(三浦しをん・強く風が吹いている)

2-6. 習慣的な動作

長い期間続く習慣的な活動などを表す場合、他の動作との同時的な関係を明示していなくても、多くは、シテイルの形をとる。シテイルの形が長期持続性を表しているのだろう。

43) 学費を出している父親からも言われた時は動揺したが、でも、真面目の何がいけないのだ、と思っている。(伊坂幸太郎・砂漠)
44) 弟は文化人類学を勉強している学生で、先生や五人ほどの仲間とここへリサーチに来たのよ。(池澤夏樹・南の島のティオ)
45) 外食チェーンや製麺所に小口で製粉を卸している小さな会社です。(荻原浩・神様からひと言)
46) 小型エンジンとその関連部品を製造している佃製作所のラインアップの中で、ステラは五年前の発売以来、稼ぎ頭といってもいいヒットになっていた。(池井戸潤・下町ロケット)

次の例は、動作主体が「が」格や「の」格の名詞にさしだされ、シテイルのかかる名詞に動作の対象がさしだされることで、所有関係などの関係的な意味も表すようになっている。

47) よかったら、俺が住んでいるアパートを紹介しよう。(三浦しをん・風が強く吹いている)
48) 子供たちの飼っているカモが虐待された。(有川浩・三匹のおっさん)
49) 板鳥さんの使っているハンマーを、一度手に持ってみたいと願っていた。(宮下奈都・羊と鋼の森)

3. スル

ここでは、動詞のスルの形が、連体という構文論的な位置において動作の進行を表すものをとりあげるが、1でとりあげたものが限界動詞であったのに対して、以下は無限界動詞のスルである。この連体のスルは一般的に次のように規定できる。

本来、文の終止の述語においてさまざまな文法的な意味を表す動詞は、連体という構文論的な機能の中で、その文法的な意味を切りすてながら、述語から規定語へと近づいていく。その具体的な形が、以下にとりあげる動詞のスルの形であるが、シテイルの段階でテンスを切りすてていた動詞は、スルになると、今度はアスペクトを切りすてる。すなわち、文の表す出来事としては、具体的な動作の進行を表しているのだが、文法的な形においては、アスペクト的な意味を明示していないのである。そして、その具体的な動作の進行が、現象描写的な叙述として働くのではなく、名詞のさしだす人や物をその場面の中で区別的に特徴づけるものとして働くことになる。

以下にあげる例のスルは、ほとんどシテイルにかえられるのだが、スルとシテイルでは、それぞれ、より自然に使われる文脈などの言語的な条件が異なっている。したがって、スルをシテイルにかえれば、そうした面もかわってくることになるだろう。

以下、スルが使われる言語的な条件をいくつかに分けて、検討していく。

3-1. 文の構文・意味的な構造

3-1-1. 動作の様態

次の例は、知覚動詞をともなっていて、その動作が知覚されているものであることを表しているが、おもに動作の様態を表すため、シテイルでなくスルが使われている。動作の時間的な展開過程ではなく、動作の側面的な特徴を中心に表しているのである。

50）風呂上がりにランニングシャツ一枚で涼む父親を見て、首筋のたるみや、薄くなった胸板に、父親はもう年老いていきつつあるんだ、と知る。（重松清・ビタミン F）

51）一心にピアノを弾く青年の背中を眺め、やがて短い曲が終わったとき、僕は心からの拍手を贈った。（宮下奈都・羊と鋼の森）

動作の様態を表すには、さまざまな手段がある。例 51,52 のように副詞によって表されるものもあれば、例 52,53 のように合成動詞によって表されるものもある。

52）きょろきょろ辺りを見回す早苗に家の角から手招き。早苗はすぐに気づいて駆けてきた。（有川浩・三匹のおっさん）

53）清一はスタンガンを振り回す則夫を米俵のように肩に担ぎ上げた。（有川浩・三匹のおっさん）

次の例は位置関係を表しているものであり、これも動作の様態を表すものと言っていいだろう。

54）喫茶店から見下ろす僕たちが全員、ひっとすくみ上がる。（伊坂幸太郎・砂漠）

55）少し先を歩く久美子は、右手を麻美と、左手を俊介とつないでいた。（重松清・ビタミン F）

3-1-2. 評価

述語が評価（あるいは判断）を表す場合、一般的な動作でなくても、連体の動詞はスルになる。これも、動作の様態など、動作の特徴づけをおもに表しているのだろう。動作の時間的な展開過程ではなく、動作そのもの（どんな動作か）が問題なのである。ただし、これは、場面の中の他の動作との時間的な関係から切り離されており、動作の具体的な進行を表していないとも言える。

《評価》

56）下を向き、「今日は、できません」と答える鷲尾氏は弱々しく、これが麻生氏と共謀した演技だと知らなかったら、いかに鳥瞰型の僕といえども、鷲尾氏に同情を覚えたかもしれない。（伊坂幸太郎・砂漠）

57）「たまたま見かけたからな。ああやって脅せば、びびって近づかねえかと思ったんだよ」目を細め、にんまりと笑う阿部薫は、笑っているにもかかわらず、凶暴さが漲っている。（伊坂幸太郎・砂漠）

《判断》

58）「あのね、この世界は今、黒い空気に覆われて、息がね、できないわけですよ。だから住人たちはみんなガスマスクをしていてね、俺だけですよ、大丈夫なのは。俺がこの空気の正体を見つけ出して」とコントローラーを握りながら喋る西嶋は、充血した目と乾燥した肌、剃っていない髭などから想像するに、かなり睡眠時間を削っているのだろう。（伊坂幸太郎・砂漠）

59）五十前後と思われる女性客に陳謝する石津は、当然といえば当然ながら、携帯電話を片手にくっちゃべっていた彼とはまるで違った。（森絵都・風に舞いあがるビニールシート）

3-1-3. 状況

次の例は時間的な状況や空間的な状況を表している。文の表す出来事が起こる時間や場所の特徴づけである。これは文の構造における周辺的なものであり、状況をさしだす名詞にかかる動詞は、述語的にはなりにくいため、シテイルが使われず、スルが使われるのだろう。ただし、以下の例の中には、3-2-2 で述べるような状態的なものもある。

60）風が吹く晩は波が荒れた。（林芙美子・耳輪のついた馬）

61）道の先では、しとしとと降る雨の中で、確かに誰かがシャベルで道を掘っている。（池澤夏樹・南の島のティオ）

62）七階に向かって上昇するエレベータの中で、雅夫はいてもたってもいられない気分になって、でたらめにシャドーボクシングをした。（重松清・ビタミンF）

63）言いつつ早苗は混み合う夕方のスーパーで、会計を済ませたカゴをサッカー台に置いた。

（有川浩・三匹のおっさん）

2-5 で述べたシテイルの表す空間的な関係のように、スルも同じように空間的な関係を表すようであるが、シテイルでは主体が単数であるのに対して、スルでは複数の主体や反復、あるいは、動作の過程が短い場合が多いようである。

63）僕と西嶋はすでに揉み合う彼らの五メートル手前というところに到着し、足を止めていた。（伊坂幸太郎・砂漠）

64）「ほんとうにご迷惑をおかけしました、明日またあらためてご挨拶に……」とホールで何度も頭を下げる岡田さんの後ろで、洋輔はうつむいたまま上目づかいに雅夫を見て、小さく会釈をした。（重松清・ビタミン F）

65）短縮ボタンを押して、ふるさとの家に電話をつなぐ。「はい、もしもし」と応える母親の声の後ろで、テレビの音が、台詞もはっきり聞き取れるほどのボリュームで流れていた。（重松清・ビタミン F）

3-1-4. 他の動作との相互作用

次の例では、動作の様態が原因となり、他の動作が引き起こされている。これもまた、表現の重点が、動作の過程ではなく、動作の様態にあるのであれば、過程を表すアスペクトは背景に退くため、シテイルでなくスルが使われることになるのだろう。もし、シテイルであれば、同時性が明示されることになる。

67）力強く、機械のように脚を繰りだす若い男の走りに、すっかり目を奪われていたせいだ。（三浦しをん・風が強く吹いている）

68）二階の玄関ポーチから恐る恐る自分を窺う息子夫婦に無性に腹が立った。（有川浩・三匹のおっさん）

この因果関係に近いものだが、連体の動詞のさしだす動作に対する反応として、主体が意志的な動作を行う場合も、次の例のように、連体の動詞はスルの形になる。

69）こちらに向かって手を振る子供に、大きく挨拶を返してやる。（しゃべれどもしゃべれども・佐藤多佳子）

70）と、そのジジイがのしのし戻ってきて祐希を引きずる残りの二人のうち一人を引っぺがし、鋭く背負い投げ――アスファルトに叩きつける寸前で一瞬止めて投げ落とした。（有川浩・三匹のおっさん）

71）机の上をひっくり返してメモを探す佃に、「メールするからいいわよ」、とまるでこっちの

様子が見えているかのように沙耶はいった。（池井戸潤・下町ロケット）

次の例は、終止の述語が表す、名詞のさしだす人に対する動作が文の表現の中心であり、名詞にかかる動詞の動作は、その名詞のさしだす人の一時的なあり方を表す背景的なものとなっている。そのため、スルが使われていると考えられる。

72）自転車を引く左官屋と、のんびりと夜道を歩く。（三浦しをん・風が強く吹いている）
73）走る男を、自転車のライトがようやく照らしだす。（三浦しをん・風が強く吹いている）

3-2. 出来事の意味的なタイプ

3-2-1. 物の動き

次の例は、どのように物が動いているかを表しているが、動きの移動経路も含めて、これも動きの様態の一種と考えられる。文の中では、名詞のさしだすものが、まず第一に重要であり、連体の動詞のさしだす動きは、そのものの一時的なあり方から、そのものを特徴づけているだけである。

物か人かで区別する必要はないかもしれないが、物をさしだす名詞にかかる動詞のほうが、スルになりやすいようなので、区別してあげておく。[4]

74）僕は茫然として、目の前を動くコップを指差す。（伊坂幸太郎・砂漠）
75）床を走るボールは、ほどなく、急に肩の力を抜くように、方向を変え、左へと曲がった。（伊坂幸太郎・砂漠）
76）鍋をまたガスコンロに戻し、流し台の縁に手をかけて、しばらくそのまま動かなかった。蛇口から流れ落ちる水が食器にはねて、カーディガンの袖を濡らす。（重松清・ビタミンF）
77）しゃあしゃあと動く女のくちびるを、麻子は唖然として見つめた。（宮部みゆき・地下街の雨）

次の例のように、生き物の動きを表すものも、物の動きに準ずるものとして位置づけておく。

78）その足にまとわりつくように跳ねるチワワが、ちぎれんばかりに尾を振った。（三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒）
79）そして、水の中でばたばた暴れるサメが波から頭を出した瞬間を見計らって殴りつけた。

---

[4] 次の例は「店内の音楽」「体の血液」に言いかえられ、動詞は形式的である。
おせっかいは余計だ、と多田は言おうとしたが、店内に流れる音楽にまぎれて消えそうなほど小さな声で、由良が「たすけて」と言ったので、黙ってそちらに視線を向けた。（三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒）
体を流れる血液の温度が上昇していくのがわかる。（荻原浩・神様からひと言）

（池澤夏樹・南の島のティオ）

次の例は、「が」格や「の」格の名詞をともない、主体の特定がなされているが、誰が関わっているかというのも動作の様態の一種と見ることができるだろうか。誰の動作に関わるものかという特徴づけである。誰の動作かということをおもに表しているのあれば、動作自体の具体的な過程は関係なく、背景に退いている。

ただし、これは、シテイルにかえにくく、関係的なものとして区別すべきかもしれない。

80）カウンターの酔客が熱唱する『ガンダーラ』を背に、恵利子は紫煙のたゆたう店内にしばし視線をさまよわせた。（森絵都・風に舞いあがるビニールシート）

81）三角の打つハネ太鼓が、太平洋の遠雷のようにはるか彼方に聞こえている。（しゃべれどもしゃべれども・佐藤多佳子）

次の例では、文全体の主語のさしだす主体と同じであるため、主体をさしだす「が」格などの名詞がないのだが、物の動きが、それにはたらきかける主体の動作の面から表されている。

82）キッチンとの仕切のカウンターに置いてあったガラスのティーポットに、ふりまわすダイニングテーブルの椅子の脚がぶつかって、ポットはとがったかけらを飛び散らせて、割れた。（重松清・ビタミン F）

83）頭から浴びる熱いシャワーの水音に、電話で聞いた和美の声が重なる。（重松清・ビタミン F）

3-2-2. 状態

3-2-2-1. 生理・心理的な状態

状態を表すものは、もともとスルの形をとりやすいのだが、連体の場合は、とくにその傾向が強い[5]。ただ、これも、シテイルと違い、その場面の中で新たに起こってきた状態を表すものが多く、その点では、1 の限界動詞の例に似ている。

84）「そんな話、聞いてないじゃん、眠いよお」とぐずる加奈子をなだめすかして車に乗せた。（重松清・ビタミン F）

85）持病の癪が起こったとは思えぬ力で、タケおばさんはためらう香具矢をドアへ押しやった。

[5] ただし、同時的な状態を表すときには、次のように、やはりシテイルの形をとる。
慌てている濱野さんに、
「なになに、何の話をしてたって？」
柳さんが聞き、僕が答える。（宮下奈都・羊と鋼の森）
それから膝を折り、まだがくがくと震えているビビの耳元でささやく。（森絵都・風に舞いあがるビニールシート）

（三浦しおん・舟を編む）

86）口の横の飯粒にやっと気づいて、小刻みに震える指でつまんで灰皿に捨てた。（重松清・ビタミンF）

87）多田は、足もとのキャリーケースのなかで蠢く小動物の気配を探った。（三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒）

3-2-2-2. 結果的な状態

変化動詞は、1で述べたように、スルで、変化の実現に向かう過程を表すが、いくつかの動詞は、変化後の結果的な状態の継続を表すことがある。

次の例は、変化動詞が、スルの形で、通常はシテイルやシタが表す結果的な状態を表しているものである。一時的な状態（の維持）を表しているため、スルをとることができるのではないかと考えられる。また、空間的な関係（配置や存在）を表すものが多いが、人の状態であれば、主体の姿勢を表すものが多い。

88）鳥井に目をやり、後方で塀にもたれかかる南を見た。（伊坂幸太郎・砂漠）

89）しゃがみ込む鳥井はひどく小さく見える。（伊坂幸太郎・砂漠）

90）禁煙のきっかけは、小学六年生だった奈穂美がリビングにこもるにおいをいやがったからだった。（重松清・ビタミンF）

91）小さくうなずく加奈子から目をそらし、中洲のそばの浅瀬に群れる鳥を眺めて、雄介は言った。（重松清・ビタミンF）

次の例もスルで結果的な状態を表している。ただし、これは、その場面の中で新たに起こってきた動作であり、限界的な動作の過程のようにも解釈できる。また、これは、感情にともなう身体的な動きによって比喩的に（換喩的に）感情的な態度を表す慣用句や慣用的な表現である。

92）マジックペンが机から浮き上がり、目の高さまで飛んだのだ。ふわっと、「引力って何だっけ？」と急に我に返ったかのような浮かび方だった。ぽかんと口を開ける麻生氏が見える。（伊坂幸太郎・砂漠）

93）肩を落とすムサを、「大丈夫だよ」と、気を取り直した神童が励ました。（三浦しをん・風が強く吹いている）

94）拓実は首を傾げる私に懸命に説明してくれたけど、ちっともぴんと来なかった。（瀬尾まいこ・図書館の神様）

3-3. 内容規定的なもの

以下のものは、名詞のさししめすものを特徴づけて、「どんな～か」を示す、より規定語的なもの

である。

3-3-1. 類型化・一般化

次の例は、スルが、名詞のさしだす不特定のものや複数のものを特徴づけている[6]。類型化した動作なので、活動を表すと言えるものもある。また、これは一般化した動作と連続的なものであり、シテイルにかえにくい[7]。

95）夜になると、夜桜を見る人で山の上は群った蛾のように賑わった。（林芙美子・風琴と魚の町）

96）旗を掲げて、募金を呼びかける中年男性たちの姿も目に入った。（伊坂幸太郎・砂漠）

97）軽快に床を跳ねる男たちのフットワークに合わせ、建物自体が揺れるかのようだ。（伊坂幸太郎・砂漠）

次の例は、慣用的になり、動詞と名詞がひとまとまりのようになっている。固定的な表現であり、一単語化していると言えそうなものもあるだろう。これらは、シテイルの形を持たない動詞であり、いわゆる連体詞のようになっているとも言える。

98）募金箱を首から下げて、道行く人に声をかけている。（伊坂幸太郎・砂漠）

99）彼女が出ていったあと、麻子は、行き交う人たちが手にしている傘を見つめながら考えた。（宮部みゆき・地下街の雨）

次の例は、例示的に、いくつかの動きをその主体とともにさしだしている。これも類型化した主体とその動作である。

100）緑の多い一方通行の道には、まだあまり人影がない。犬を散歩させる老人や、早朝からバス停に向かうサラリーマンと、たまにすれちがう程度だ。（三浦しをん・風が強く吹いている）

101）河原には、体操をする老人や犬の散歩をするひとが、まばらにいるばかりだ。（三浦しをん・風が強く吹いている）

6　主体が単数の例もある。
ファストフードの広告を配る女の子から、ビラを受け取った後で、「西嶋、僕は思うんだけど、鷲尾さんは超能力者じゃないかもな」と言った。（伊坂幸太郎・砂漠）

7　次の例のように、より具体的な動作の場合は、シテイルにかえられる。
駅前にたむろする若い男たちに陽子の話を重ね合わせてみても、目にする誰もがヒデに思えてくるだけだ。（重松清・ビタミンF）
式が終わり、講堂を出ると、大勢の参加者で構内は埋め尽くされた。あちこちで立ち止まり、語り合う集団がいて、僕たち四人はその間を縫って、歩いた。（伊坂幸太郎・砂漠）

3-3-2. 習慣的な動作

次の例は仕事や習慣をスルが表しており、それが名詞のさしだす主体を特徴づけている。長期的な動作はシテイルで表されることが多いが、主体の特徴づけを表す場合は、スルも使われる。

102）郁子さんは名門女子大に通うお嬢さんで、俺はまだ半人前の噺家で、そんなことをひがんでいるのだろうか。そうかもしれない。（しゃべれどもしゃべれども・佐藤多佳子）

103）個人輸入業を営む義父が息子夫婦のためにと建ててくれた一軒家に住まい、住宅ローンに追われることなく生活できるだけでも十分に恵まれていた。（森絵都・風に舞いあがるビニールシート）

3-3-3. 動作の側面

3-3-3-1.「におい、音、声」

次の例は、動詞のさししめす動作によって生じる音やにおいなどの現象を名詞がさしだしている。そして、連体のスルが、それが「どんな～か」ということを表しているのである。

104）玄関のチャイムは鳴らなかったが、ドアを開ける音が聞こえて、修一はリビングのソファーから腰を浮かせた。（重松清・ビタミンF）

105）一坪の厨は活気を呈して鰯を焼く匂いが僕の生唾を誘った。（林芙美子・魚の序文）

しかし、次の例は上の例とは少し異なるもののようである。「…するときの～」のような意味を表し、述語的なシテイルに近い。動詞と名詞のあいだに、指示的な規定語が入ることがあるというのが、特徴である。

106）ぎゃはは、と笑う彼の声が、暗い町内に響く。（伊坂幸太郎・砂漠）

107）頭上から、足を組みかえる靴の音とともに、電話に応えるホスト純の声が聞こえた。（伊坂幸太郎・砂漠）

3-3-3-2.「表情、顔、まなざし、目」

次の例は、「表情、顔、まなざし、目」といった名詞が使われているものだが、これも、「どんな～か」という規定語的なものと、「…するときの～」という、より述語的なものがある。

《どんな～か》

108）そのつもりはなかったが、頬がゆるんで、笑う顔になった。（重松清・ビタミンF）

109）助けを求める眼差しと目が合った。（有川浩・三匹のおっさん）

110）周囲の客たちがちらちらとこちらに視線を向けてくるのが気になる。その美人はおまえ

の恋人なのか、どうなのだ、と詮索する目だ。（伊坂幸太郎・砂漠）

《…するときの～》

111）立ち止まって笑う顔は、もうマスオさんではなかった。（重松清・ビタミン F）

112）けれど喋る彼女の表情には、何者かに状況を報告するスパイじみた気配があり、企みを抱えた様子にも見えたのだ。（伊坂幸太郎・砂漠）

113）窺うその表情に返事を投げる。（有川浩・三匹のおっさん）

114）孝夫を見つめるまなざしは、いつのまにか憮然としたものに変わっていた。（重松清・ビタミン F）

3-3-4. 内容としての動作

次の例は、名詞のさししめす場面などの内容を示している。これは、どんな場面かを表しているだけで、非時間的なものと言える（2-4 参照）。

115）本間が経理から金を受け取るところを誰も見てないだろ。（荻原浩・神様からひと言）

116）コンサートの映像を観てたら、オーケストラをバックに二台のピアノが連弾するシーンが出てきたんです。（宮下奈都・羊と鋼の森）

3-4. 特殊な構文論的な構造

3-4-1.「いる、ある」

次の例のように、無限界的な動作を表す動詞が連体の位置にあり[8]、終止の述語が「いる、ある」の場合、全体として、出来事が進行していることを表している。[9]

117）僕と西嶋が、あのキックボクシングジムへ、見学に行ったのは先月のことだ。そこには、真剣な目でサンドバッグと向かい合い、鋭い声を上げ、蹴りの練習をする鳥井がいて、僕たちは目を丸くした。（伊坂幸太郎・砂漠）

118）右手の離れたところに、土手をはしゃいで転がる男の子たちが三人、いた。（伊坂幸太郎・砂漠）

8　連体のスルが限界動詞の場合は、限界的な出来事がその場面に生じたことを表している。これは 1 で述べた、スルしか使えない例である。

翌日、僕が大学の講義室でノートを片付けていると、隣に座る男がいた。（伊坂幸太郎・砂漠）

9　次のようにシテイルの例もある。

僕は言い淀みながら、彼女の背後の店内に目をやる。水色の T シャツを広げている女性がいた。（伊坂幸太郎・砂漠）

3-4-2.「手、足」

次の例は、名詞が「手」などの体の部分になっていて、「手」が動作を形象的に（間接的に）表している。そして、「止める」などの終止の述語が続き、その動作の中止を表すものが多い。動作の主体は、異なる場合もあるだろうが、同一主体であることが多い。

シテイルも似た意味を表すようだが、「手」ではなく、「手元、手つき」が使われ、知覚される動作を表していた（2-2 参照）[10]。

119）柳さんは道具を鞄に片づける手を止めて、ありがとうございますと頭を下げた。（宮下奈都・羊と鋼の森）

120）階段を朱色の女がとんとんと降りてくる。俺は上る足を止める。やあと挨拶した。（しゃべれどもしゃべれども・佐藤多佳子）

3-5.「しつづける」「していく、してくる」

「しつづける」や「していく、してくる」など、動作の過程の段階を表す形は、スルの形をとることが多い[11]。とくに「していく、してくる」は、もともとシテイルの形をとりにくいものである。

121）本間に聞こえそうな声で怒り続ける篠崎の肩をそっとつつき、デスクの上に黒い表紙のノートを立てた。（荻原浩・神様からひと言）

122）梯子段をトントン上って来る梅乃の声だ。（林芙美子・耳輪のついた馬）

123）ゆっくりと下降していくエレベーターの動きを感じながら、頭上にある階数表示をじっ眺め、そして、二階を通り越すあたりで西嶋が、「左腕の切断って何ですか」とようやくそのことを口に出した。（伊坂幸太郎・砂漠）

おわりに

以上のように、連体という構文論的な位置において動詞は、具体的な動作の進行を表すとき、シテイルの形もスルの形もとり、両者を言いかえられることが多いが、シテイルの場合は、他の動作との同時的な関係を表す述語的な用法であり、スルの場合は、名詞のさしだすものの特徴づけとしてはたらく規定語的な用法と言える。

動詞は、終止の述語となるというのがもっとも基本的な機能であるが、それが、連体という構文論的な位置に置かれると、連体の述語として働くだけでなく、さらに、その、文における構文論的

10　スルが使われている「手もと」の例もある。
玄関の鍵を開ける由良の手元を、多田はじっと見ていた。（三浦しおん・まほろ駅前多田便利軒）

11　「しつづける」はシテイルの形をとることもあるが、その場合は、他の動作との同時的な関係を示す。
涼平は鳴り続けている電話に目配せをする。（荻原浩・神様からひと言）
うなじをかき、後ろを振り向いて、ひたすら湯きりざるを振り続けている坊主頭に声をかけた。（荻原浩・神様からひと言）

な位置の持つ機能にしたがって、規定語に近い働きをするようになる。規定語と連体の述語とは、日本語では形態論的な区別も構文論的な区別もないので、連続的なものである。本稿では、連体の位置にある動詞のスルとシテイルが動作の進行を表す用法を実例によって記述しながら、規定語的な用法と述語的な用法について、その区別と連続性を記述的に明らかにした。

《参考文献》

須田義治（2009）「現代日本語の状態・特性・関係を表す動詞の連体形」『国語と国文学』86-11, ぎょうせい

（2019）「日本語動詞の連体形のアスペクト」『日中言語対照研究論集 第 21 号』1-23、白帝社

高橋太郎（1994）『動詞の研究』むぎ書房